

## 〈資料紹介〉

## 『新小説』について

教授 國中 治  
(国文学〈近代文学〉)

平成という時代を生きる私たちにとって、大手出版社が看板とする文芸雑誌の存在感はあまり大きなものとはいえない。しかし、かつて文芸雑誌は、文壇という枠を超えて広範な読者に文学の規範と可能性を提示する臨場感あふれる生成の場だった。明治から大正にかけて、博文館の『文芸倶楽部』と並んで日本の文学界を導いた春陽堂の『新小説』も、間違いなくそのような輝かしい文芸雑誌の1つである。

『新小説』は明治22年1月から23年6月までの第一期(通巻28冊)と、明治29年7月から大正15年11月までの第二期(通巻371冊)とに分かれる。第二期末期には『黒潮』と改題され3冊を発行して終刊となる(昭和2年1月～3月)。第一期の編集を担ったのは須藤南翠、饗庭篁村、森田思軒。政治小説で一世を風靡した南翠、江戸文芸を基底とした篁村、フランスの通俗小説を数多く訳出した思軒。明治20年代初頭の新旧文学の交代期に国家建設に貢献しうる新しい小説の興隆を目指したのが第一期なのだが、これら中核となった顔ぶれを見ると、文学をまず功利性から価値づける点で、文学を自己の内面的問題と関わらせる坪内逍遙、二葉亭四迷、森鷗外らとは懸隔がある。新しい小説を求めつつも江戸戯作からの本格的な脱却は難しかった。

だから『新小説』の文学史的意義のほとんどは第二期にある。編集主任としてこの雑誌の性格を決定づけたのは、創刊時に新人発掘を理念として掲げ大胆な誌面を作成した幸田露伴と、特定の流派・主義主張に偏らない編集方針を貫いた後藤宙外である。尾崎紅葉門下の硯友社の若手作家たちを次々に登用し、



『新小説』マイクロフィルム

新体詩から小説への転換期にあった島崎藤村に作品発表の場を与えるなど、新人文学者に対する厚遇は『新小説』の特徴でありつづけた。また田山花袋「蒲団」(明治40年9月)発表に踵を接して夥しい自然主義批判の評論も掲載されたことは、この雑誌のバランス感覚を端的に物語る一例である。

以下、第二期の誌面を飾った主な小説を挙げてみる。紙幅の関係で割愛せざるを得ない作品も多いが、これらだけでも、もし日の目を見ることがなかったらと考えると、『新小説』の存在感が改めて迫ってくる。広津柳浪「河内屋」(明治29年9月)、小栗風葉「亀甲鶴」(明治29年12月)、正岡子規「花枕」(明治30年4月)、泉鏡花「高野聖」(明治33年2月)「歌行燈」(明治43年1月)、夏目漱石「草枕」(明治39年9月)、岩野泡鳴「耽溺」(明治42年2月)、永井荷風「すみだ川」(明治42年12月)、森鷗外「堺事件」(大正3年2月)「寒山拾得」(大正5年1月)、芥川龍之介「芋粥」(大正5年9月)「枯野抄」(大正7年10月)、谷崎潤一郎「魔術師」(大正6年6月)、有島武郎「カインの末裔」(大正6年7月)、志賀直哉「赤西蠣太の恋(のち「赤西蠣太」と改題)」(大正6年9月)、横光利一「日輪」(大正12年5月)。